

共に生きるために



2025^{年度}事業報告書

April 1, 2025 - March 31, 2026



学校法人 アジア学院

目次

2025 年度ハイライト	4
農村指導者を育てる - 教務課 教務	
雨のあとに虹は架かる	6
2つの特別研修	9
食べものといのちを育む - フードライフ課	
酷暑を越えて、土と命を育む一年	10
共に生きることを学ぶ食卓	11
学びのコミュニティ - 教務課 共同体生活	
世界が集う、小さな共同体	12
開かれた学びの場	
- 募金・国内事業課 オープン・ラーニング・プログラム	
ヒューゲルカルチャーに学ぶ、つながりの育て方	14
サポーターと共に	
- 関係構築・アウトリーチ、国際関係、販売	
未来につながるパートナーシップを育てる	16
カナダ合同教会の多大なるご支援に感謝	17
「食べて」支える持続可能な学び	
卒業生とのつながり - 教務課 卒業生アウトリーチ	
手を取り合い、励まし合うアジア学院同窓会	18
会計報告	20
農村指導者研修プログラム・カリキュラム	22
コミュニティメンバー 一覧	23
2025 年度 卒業生	24



田植え（6月）

ごあいさつ

2025 年度の歩みを振り返るにあたり、まず心に浮かぶのは、有機農業の田んぼに広がる小さな生命の躍動です。農業や化学肥料に頼らず、土の力を信じて耕された田んぼでは、微生物が豊かに息づき、その営みが水を澄ませ、オタマジャクシが群れをなして泳ぐ風景が戻ってきました。そして、その先に現れたのが、かつては当たり前でありながら、今では絶滅が危惧されるタガメの姿です。この小さな生き物の回帰は、単なる自然環境の回復にとどまらず、人と自然の関係が再び結び直されつつある確かな証しと言えるでしょう。

本年度はまた、戦後 80 周年という節目にあたり、なお世界各地で戦争や紛争が続く現実に向き合いながら、アジア学院として平和宣言を採択いたしました。私たちは、平和とは単に争いがない状態ではなく、いのちが尊ばれ、互いに支え合いながら共に生きる関係性の中にこそ築かれるものだと考えています。その意味において、土を耕し、いのちを育む営みは、平和そのものを体現する行為にほかなりません。

タガメが戻った田んぼは、「土からの平和」を象徴する風景です。見えない微生物から始まり、多様な生き物がつながり合うその世界は、分断や対立ではなく、共生と循環によって成り立っています。私たちは、このような価値観を農村の現場から学び、世界へと伝えていく責任を担っています。

アジア学院は、アジア・アフリカをはじめとする各地の農村コミュニティから集う人々と共に、持続可能な農業と共生の哲学を学び合い、それぞれの地域に持ち帰って奉仕するリーダーを養成してきました。小さな村の実践であっても、それが連なれば大きな変化となり得ます。今、私たちの使命はこれまで以上に重く、そして大きな広がりを持っていると感じています。

土に触れ、いのちのつながりに目を向けるとき、私たちは平和の源であるいのちの根源に立ち返ることができます。この確信を胸に、これからも世界の仲間たちと共に、「土からの平和」を力強く証しし続けてまいります。



山本 俊正
理事長



荒川 治
校長

2025年度 ハイライト

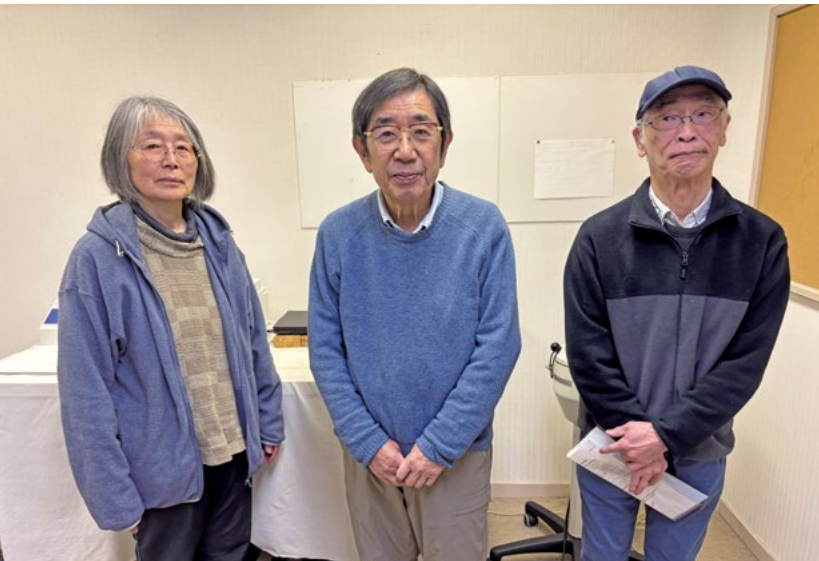
2025 Highlights



受賞記念活動報告会（2月14日、毎日新聞大阪本社にて）

毎日地球未来賞(大賞)を受賞

毎日新聞社が主催する「第15回クボタ・毎日地球未来賞」において、一般の部の「毎日地球未来賞（大賞）」を受賞いたしました。50年以上にわたり、開発途上国の農村指導者と「土と共に生きる」生活を実践してきたこと、循環型有機複合農業によって90%を超える食料自給率を達成していること、そしてジェンダー公正や平和構築への多岐にわたる取り組みが評価されました。



ベクレルセンターボランティアの皆様

ベクレルセンターが営業を終了

2012年1月に開設したベクレルセンターは、2026年3月末をもって営業を終了いたしました。福島第一原発事故後、地域に開かれた放射能測定施設として学院内外の食と農の安全に寄与し、当初の継続目標であった10年を超えて、14年間にわたり約8,000検体の放射能測定をすることができました。ご支援くださった皆様、測定ボランティアの皆様に、心より感謝いたします。

アジア学院の新たな平和宣言

戦後80年の節目となった2025年、アジア学院は新たに平和宣言を行いました。2007年に学院で行われた「土からの平和シンポジウム」で採択されたものを基に、新しい世代の課題と世界各国の学院メンバーの声を反映して練り上げられ、9月16日の創立記念日の礼拝で全員の声で読み上げられました。

宣言は以下の項目からなり、全文はウェブサイト上で読みいただけます。

1. 歴史の過ちを忘れず、平和を脅かすあらゆる力に声をあげ続けます
2. 自由と正義、差別の克服に根ざした平和な社会を構築します
3. 地域社会に仕えるリーダーを育成し、共に平和の器となります
4. 「土からの平和」を推進します

また、8月15日の「戦後80年を覚える集い」、「食べものからの平和」キャンペーン（p.16参照）、元日本軍捕虜との和解の活動続ける恵子ホームズさんを迎えた講話など、数々の取り組みを通して平和を多角的に考えました。

平和宣言全文はこちら→ ari.ac.jp/ari-peace-declaration-80th-anniv-of-end-of-wwii



戦後80年を覚える集い（8月15日）

荒川治新校長が就任

2015年度から校長を務めた荒川 朋子が2024年度をもって退任し、2025年4月より荒川 治が校長に就任いたしました。荒川朋子は常務理事、関係構築・アウトリーチ統括となりました。

（同じ名字ですが、家族ではありません。）

アジア学院北米後援会（AFARI）、 「KIBO アライアンス」に名称変更

「KIBO」は、日本語で「希望」、スワヒリ語でも似た意味で解釈される言葉で、タガログ語では「行動」を意味します。名称は変わっても使命は変わらず、学院のための資金調達、世界中で活躍する卒業生への支援を今後も続けてまいります。

訃報 田村嘉應氏 アジア学院元評議員（1991～1993年度）、 元理事（1994～2003年度）

一般財団法人アジア農村交流協会創設者であり、元専務理事の田村嘉應氏が、2026年3月に逝去されました。同協会は、アジア学院に関する新聞記事に心を動かされた田村氏が中心となり、氏の私財をもとに1988年に設立されました。以来、同協会は毎年4名の学生への奨学金支援を38年にわたり継続してくださっています。田村氏は、入学式や卒業式には毎回ご臨席くださり、卒業生を訪ねる旅にも積極的にご参加くださいました。奨学生をご自宅に招き、ご夫婦で温かく迎えてくださったことは、学生たちにとって大切な思い出です。



田村嘉應氏（左）

メディア掲載・出演

2025年度、様々なメディアにアジア学院を取り上げていただきました。

1. 上毛新聞（群馬県地方紙）
視点オピニオン 21
2024年10月から2025年8月全6回、荒川朋子の記事が掲載される
2. 太平洋放送協会制作 ラジオ
「世の光いきいきタイム」
4月19日 イースターススペシャルインタビュー荒川朋子出演
3. TBS ラジオ「篤信彦 人生百景～志の人たち～」8月17日、24日（2回）
荒川朋子出演
4. 下野新聞（栃木県地方紙）12月16日「平和のかたち とちぎ戦後80年」シリーズ「戦禍の残像 継がれる痛み ⑦」（最終回）
荒川治校長インタビュー記事掲載
5. 毎日新聞
2月11日および3月20日、毎日地球未来賞受賞者として紹介記事掲載

農村指導者を育てる

教務課 教務



真の責任ある担い手としての役割（スチュワードシップ）を果たすためには、一人ではなくコミュニティの連帯と共働が不可欠です。責任を分かち合い、協力することによってのみ、私たちは土壌を守り、環境を保護し、次世代のために健康で持続可能な未来を確保することができるのです。



エリザベス・ンゲン・チン・パー
学生（ミャンマー）



苗の植え付け（4月）

コーチングの授業風景（11月）

雨のあとに 虹は架かる

農村指導者研修プログラム報告



阿部・チャタジー・マノシ
教務主任

9 か月間の研修プログラムを通して、何人も学生が重大な家族の悲劇に直面しました。その結果、28名の学生のうち1名が中途帰国せざるを得ませんでした。他の学生たちも、この困難な時期に「家に戻りたい」という思いを抱きながらも、プログラムを修了することへの強い意志を持ち続けました。彼らのレジリエンス（回復力）は神への信仰に根ざし、アジア学院や母国のコミュニティからの愛とケアによって支えられていました。

「共に生きる」を問い続けた一年

年間を通して、私たちは対話や内省、そして共同作業を通じて「コミュニティ」の意味を探究しました。その中で、多くの共通の経験や価値観を見出しました。しかし同時に、プログラムの様々な場面で次のような難しい問いにも向き合いました。「私たちは本当に『共に生きて』いるのか、それとも互いに黙って我慢しているだけなのか」「私たちは本当に互いを受け入れているのか、それとも

コミュニティ生活の難しい側面から目を背けているのか」。これらの問いに簡単な答えはありません。むしろ、コミュニティを築くためには、何度も繰り返し向き合い、実際に生きながら考え続ける必要がありました。

土に根ざした実践的な学び

今年はまだ、元農場長の荒川治が校長として就任した年でもありました。新校長はサーバント・リーダーシップと有機

農業の密接な関係を強調しました。どちらも、すべての命の源である神と土への深い感謝に根ざしています。学生たちは、教室での学びと日々の農作業を通じて、このつながりを体験しました。

個人プロジェクトでは、実践的なスキルを深めたり、自分たちのコミュニティのニーズに応えるテーマを探究したりする機会が与えられました。多くの学生が食品加工の技術を身につけ、他の学生は代替飼料、アメリカミズアブ幼虫の生産、バナナ茎サイレージの生産実験に取り組

みました。また、インタビューの実施、資料の翻訳、帰国後の活動を支える教材の作成などを行った学生もいました。

しかしながら、学生からのフィードバックからは、カリキュラムが今後も進化し続ける必要があることがわかります。特に、起業や収入創出に関するスキルの強化、さらに気候変動に強い農業や持続可能な畜産に関する学びを、学院の農場の中でより深めていく必要性が高まっています。



(写真) ① アジア・インターンシップ・プログラムでインドネシアに滞在した大木瑞紀さん(右から3人目)
② 東京ホームステイプログラム ③ 西日本研修旅行で訪れた大阪 YMCA
④ 西日本研修旅行で訪れた広島平和記念公園



ベリヤンティ・オクタヴィア・ダマニク

学生 (インドネシア)

私のコミュニティでも、美佐子さん*のような勇気を育むべきだと思います。そうすれば、女性たちが「違う」とレッテルを貼られることを恐れずに力を発揮し、さまざまな形で自己表現できるようになります。自立した思考と挑戦する勇気は、有機農業の推進を含め、新しいことを始める上で不可欠です。

* 渡部美佐子さんは山形の有機農家で、農村地域研修旅行で訪問しました。

広島原爆や、日本における沖縄の人々への差別について学んだ後、「あなたに平和がありますように」という言葉の持つ力強い意味に気づきました。平和はとても貴重で、誰にとっても必要なものです。だからこそ、今日は自分の行動や教えを通して、コミュニティに平和を広める責任があります。



サンブロ・シゾ・ンカベラ

学生 (エスワティニ)

彼ら自身の言葉で言えば、「すべての人の尊厳を守り、他者のニーズに真摯に耳を傾け、誰一人取り残さない社会を目指して」います。この使命は決して容易ではありません。しかし、西日本研修旅行で学生たちが歌った「にじ」の歌が教えてくれるように、雨のあとには美しい虹が架かります。2025年の献身的なリーダーたちとともに、私たちは明日がきっとより良くなるという希望を持て続けることができます——「きっと明日はいい天気」。

2つの特別研修



荒川 朋子
常務事理
(関係構築・アウトリーチ統括)

アジア学院では農村指導者研修に加え、2つの特別研修を実施しています。ひとつは関係団体の組織強化を目的とする OCBP（組織強化研修）、もうひとつは三重県のアジア学院農業高校（以下「愛農高校」）専攻科生の受け入れです。OCBP は 2018 年開始以来 5 回目、愛農高校専攻科の受け入れは今年度が初となりました。



【OCBP】2006 年度卒業生でカトリック新潟教区司祭の伊藤幸史神父が、3 月後半から 12 月 8 日まで約 8 か月間研修に参加。アジア学院卒業後に長野県小谷村で「信州風の家」を開設し、自然の中で癒しと祈りの場を提供してきました。今回は同地で本格的に田んぼづくりに取り組む準備として研修を受けました。



【愛農学園農業高校専攻科】愛農高校の卒業生が 1 年間農家に住み込み農業経営を学ぶ実習プログラムの履修生として、門田鷗介さん(写真右から 2 番目)が 10 か月間、アジア学院で主に養豚部門に携わり、地元で入手可能な飼料を使った養豚の費用対効果などについて研究しました。

酷暑を越えて、 土と命を育む一年

農場報告



櫻井 将伸
フードライフ課
農場長

食べもののいのちを育む

フードライフ課

2025年の夏は記録的な酷暑が続く極めて厳しい気候条件となりました。この状況を乗り越えるべく、農場では早朝作業体制「サンライズファーム」を導入し、作業効率の維持と農産物の品質確保に注力しました。また、愛農学園農業高校専攻科生の門田鷗介さんおよびOCBT(組織強化研修生)の伊藤幸史さん(ともに P.9 参照)を迎え入れ、現場実践を通じた技術継承を積極的に進めました。

有機農業と循環型のものづくり

2025年度も学生たちが管理する畑では、プラスチック資材の使用を避け、竹を支柱として、また米袋を開いて紙マルチとして使用する等の工夫をし、土に還元可能な資材を多用して野菜の栽培管理

を実施しました。タマネギ栽培では、播種前に十分な水やりを行うことで土壌内の水分バランスを整え、酷暑下でも安定した発芽を促すことに成功しました。ニンジン栽培においては、約 4,000kg の収穫を達成しました。この豊富な収穫量を背景に、2025 年度はニンジンジュース 8,000 本の製造を達成し、生産から加工に至るまで一連の成果を得ることができました。

命を育て、未来へつなぐ

畜産分野では、門田さんと共に、豚の肥育管理を軸とした研修を実施しました。とくに人工授精技術の精度が飛躍的に向上したことで、受胎率の安定と生産効率の改善を実現し、多くの豚肉を得るに至りました。精肉過程における技術に

おいても顕著な進歩が見られました。また、ヤギの繁殖にも成功し、新たな命の誕生は農場全体の活性化につながりました。一方、養鶏部門に関しては、さらなる卵生産の向上を目指し、現在、管理施設の見直しや環境改善の検討を進めています。

本年度は「サンライズファーム」の導入により、酷暑という困難な環境下でも、野菜作物栽培・畜産・加工の各部門で着実な進歩を遂げることができました。学生やボランティアの方々と共に作業に当たり、有機農業の実践における労働を共有した経験は、農場全体の基盤強化に大きく寄与しました。

今後は、確立した育苗・肥育技術をさらに向上させるとともに、食料生産体制をより盤石なものにし、気候変動に左右されない農場づくりを目指していきたいと考えています。



写真上：新しく繁殖した子ヤギ
写真左：ニンジンの収穫

パーセンテージは前年度比		
2025 年農産物生産量		
米	8,271 kg	104.5 %
小麦	3,650 kg	158.4 %
にんじん	4,073 kg	257.3 %
じゃがいも	982 kg	50.8 %
たまねぎ	1,069 kg	305.5 %
さつまいも	917 kg	72.3 %
山羊乳	397 ℓ	N/A
豚肉	54 頭	128.6 %
鶏卵	77,296 個	75.3 %

※畜産物は 1 月～12 月の数値

共に生きることを 学ぶ食卓

FEAST (給食・食育) 報告



藤吉 求理子
フードライフ課
FEAST (給食・食育)

ア ジア学院の FEAST は、共に生きることを学ぶ最適な場所だと思っています。

2025 年度もたくさんのチャレンジがありました。あらゆる文化、背景、歴史、宗教をもつ多種多様な人たちの食事を毎日用意するのですから、一筋縄ではいきません。「辛くなければ食事じゃない」という人や、「1 ミリでも唐辛子が入っているものは食べられない」という人がいる中でどう料理するか、日々試行錯誤が重ねられます。キッチンで働くペースも人によって全然違うため、時には口論になり、声を荒げ涙を流すこともあります。

しかし 9 ヶ月の間、共に種を蒔き、草を抜き、豚の出産に立ち会い、調理し、食卓を囲むというフードライフの営みを通して、食への姿勢が変わっていきます。仲違いをしたメンバーが体調を崩した時、故郷の食事を届ける優しい姿がありました。また人参の美味しさに感動した学生が、夜中に大きなケーキを焼いて振る舞ってくれたこともありました。

フード＝ライフ。生き方や考えがどんなに違ってても、土もヤギも草も猫も人も、神様の創造した大きな輪を形作る、かけがえのない一つ、一人であることを、深く学ぶ 1 年でした。



パーセンテージは前年度比			
食堂で提供した総食数		44,963 食	117.5 %
主な食材の消費量		米	4,646 kg 114.2 %
		小麦粉	205 kg 66.8 %
		豚肉	752 kg 93.5 %
		鶏肉	183 羽 81.3 %
		卵	21,531 個 105.4 %
		大豆油	10 ℓ 10.9 %
外部からの購入		575,153 円	119.5 %
		1 食あたり 12.8 円	101.8 %



学びのコミュニティ

教務課 共同体生活

収穫感謝の日(HTC)で自前の民族衣装を纏う学生とボランティア(10月)

世界が集う 小さな共同体

共同体生活報告



ジョエラ・ラナイヴォソン
共同体生活コーディネーター

2025年度は、アジア学院にとって変化の絶えない一年でした。私自身、アジア学院職員として、そして共同体生活コーディネーターとしての最初の年を迎え、この小さくもユニークで神秘的なコミュニティの文化や生活習慣、そのリズムを学ぶ「初めて」の連続の一年でもありました。

2025年度のコミュニティには、17カ国からの学生、7カ国からのボランティア、そして8カ国からのスタッフが集まりました。わずか60名ほどの集団の中に、23カ国もの背景を持つ人々が共存していたことになります。

これほどまでに国際的で多様性に富んだ豊かなコミュニティの一員であること

は、皆さんの想像通り、素晴らしいと同時に挑戦の連続でもあります。「ARI English」と愛情を込めて呼ばれる、標準的な英語とは一味違う独自の共通言語で意思疎通をとる喜びと苦勞、毎食の世界各地の趣向を凝らした美味しい食事、そして自分と似ているようで、根本的に異なる人々と寝食を共にする中で成長する経験。

私の父が集合写真を見て言った、「この小さな場所に世界が集まっているんだね。」という言葉は、まさに真実です。昨年も、世界がアジア学院に集い、育まれ、大切に守られてきました。

2025年度は、深い悲しみに直面すると同時に、大きな成長を遂げた年でもあ



増川 真子
長期ボランティア

小さな地球に住んでいるような感覚でした。日々の暮らしの中で、思わぬ偶然が形を変えながら必然のように巡っていくのを目の当たりにしました。誰かを想う小さな祈りが誰かの暮らしに静かに響いていました。共に食し、共に歌い、共に生きることで、遠く隔たれていると感じていた文化や宗教、歴史さえも同じ循環の中で息づいているということを思い出させてくれたのです。



エミ・ハーナー
インターン
ヨーテボリ大学（スウェーデン）
元ボランティア（ドイツ）



デジャ・デイヴィス
インターン
ウィルミントン大学（米国）

アジア学院は私にとって特別な場所です。世界中から集まった人々と共に成長できる機会は、滅多に得られません。現代において一歩立ち止まり、日々を大切に生きることを、皆が教えてくれました。時には、ただ一緒に座ってピワの実を頬張るだけの穏やかな日もありました。学院を去る頃には、共に生き、共に働くことについて、全く新しい視点を得ていました。

りました。コミュニティが直面した困難に対し、「共に生きる」という使命を形にすべく、私たちは対話、共感の輪の構築、仲裁といった、地道で根気の要る方法でコミュニティ形成に取り組みました。

苦渋の決断を迫られる場面もあり、コミュニティとして葛藤した時期もありました。日々の過密なスケジュールの中で、学び、教え、奉仕し、働かたわらで、私たちは互いに出会い、耳を傾け、理解し、そして精一杯愛そうと試行錯誤を続けました。

成功したこともあれば、失敗に終わることもありましたが、「挑み続けること」を止めることはありませんでした。12

月に学生たちが帰国の日を迎えても、職員と研究科生、ボランティアだけで過ごす静かな冬の間にも、互いを見つめ、共に寄り添い、理解し、愛そうとする私たちの歩みは続きました。

私たちは共に、不完全な一本一本の糸を持ち寄り、美しくも「ありのまま」のタペストリー（織物）を織り上げました。学生、ボランティア、職員の一人ひとりが自らの役割を織り込み、アジア学院にその足跡を記してくれました。大きな喜びと共にこの一年を締めくくることができたことに、心から感謝しています。

ボランティア & インターンの声



クリス・ミーダー
& スコット・バート
長期ボランティア
合同メソジスト教会（米国）

元弁護士私たちの夫婦は、教会から派遣され、農業経験は全くないままアジア学院にきました。周囲からは、なぜここに来たのかと尋ねられました。農家になるためでないことは明らかです。ここでのボランティアを選んだのは、自分たちが「空っぽ」だったからでしょうか。それとも「満たされていた」からでしょうか。アジア学院のエコノミーは取引に基づくものではありません。自分を捧げれば捧げるほど、多くを受け取ったのです。

2025 年度ボランティア参加人数

19名 8名 29名

長期ボランティア インターン 通いボランティア

ボランティア派遣団体

【ドイツ】連帯のための宣教会(EMS)、Social Peace Service Kassel, e.V. (SFD)
【米国】合同メソジスト教会グローバル・ミッション・フェロー、合同メソジスト教会ボランティア・イン・ミッション
【インドネシア】バタック・プロテスタント・キリスト教会【日本】愛農学園農業高校

インターン派遣団体

【米国】ウェルズリー大学、セントオラフ大学、ウィルミントン大学
【スウェーデン】ヨーテボリ大学
【日本】国際基督教大学、梅光学院大学



開かれた学びの場

募金・国内事業課 オープン・ラーニング・プログラム

ヒューゲル カルチャーに学ぶ、 つながりの育て方

オープン・ラーニング・プログラム報告



山下 崇
募金・国内事業課長
教育プログラム・
那須セミナーハウス主事

ヒューゲルカルチャーって知っていますか？

ドイツ語で「盛り土栽培」を意味し、有機物を土中に埋め自然の力で育てる農法です。根と菌がネットワークを築き、水や無機栄養と糖を交換しながら共生していきます。2025年度、私たちは「インテグレーション（つながり）」をテーマにプログラムを行ってきました。

地域とのつながりを作るために古本市とちょこっとファーム＆フォレストを実施しました。使われていなかった宣

教師館を改修し古本市は年2回開催へ。ちょこっとファームでは、親子が土に触れ、食べものが生まれる過程をともに味わう時間が広がりました。

また、インドネシアスタディツアーでは、幅広い世代の10人が参加し、卒業生のもとを訪ねました。日常から遠く離れた暮らしに触れ、自分の当たり前が揺さぶられる中で、それぞれが新しい視点を持ち帰りました。

さらに、ビジネスパーソンとのつながりにも挑戦しました(P.16 参照)。ファンドレイジングの可能性を探りながら、いかにして企業と協力関係を築き社会に良いインパクトをもたらすことができるか模索し、9月のモニター合宿では、自然と資本主義という一見離れた世界をどう結び直せるか、対話を重ねました。

一方で、これまで中心だった大学生の参加は大きく減少してしまいました。毎年引率で来る先生はこうに言っていました。「学生たちは時間や経済の合理性が優先される社会が進んでいるため『つながり』に向き合う余裕が失われてきている。」

しかし、だからこそ今、アジア学院に来て「世界」を体験してほしい。違いを持つ人と人が出会い、影響し合い、やがて自分自身が変わっていく。ヒューゲルカルチャーのように、見えないところで支え合いながら、関係がゆっくりと育っていく。その積み重ねが平和へとつながっていくと信じてプログラムを行ってきたいと思います。

“

共に生きる、ということが本当に実践されているのを体感させていただきました。生徒たちの表情がだんだんほぐれていって笑顔が増えたのも印象に残っています。(中学校教員)

命のバトンや循環を改めて感じました。また、子供たちと共に平和について考えたことが心に残りました。日常生活のなかで、平和を感じる時間に思いを馳せて家族と大事にしていきたいと思いました。(イングリッシュファームキャンプ参加者)

”

(写真)

① 国際基督教大学（ヒューゲルカルチャー）② 日本YMCA 同盟（カレーワークショップ）③ 学生キリスト教友愛会夕食会 ④ 企業&アジア学院共通の願いでつなぐモニター合宿 ⑤ 筑波大学附属板戸高校（飼料用トウモロコシの収穫）⑥ 同志社大学（ヒューゲルカルチャー）⑦ 筑波大学附属板戸高校（カレーワークショップ）⑧ インドネシアスタディツアー ⑨ インドネシアスタディツアー



サポーターと共に

関係構築・アウトリーチ、国際関係、販売



「食べものからの平和」キャンペーン

未来につながる パートナーシップを育てる

関係構築・アウトリーチ報告



荒川 朋子
常務事理（関係構築・アウトリーチ統括）

2025年度、支援者やパートナー団体と持続的、発展的、相互扶助的な関係を築き、戦略的に資金獲得することを目指し、「関係構築・アウトリーチ部門」が設置されました。この部門は、国内外の募金活動、スタディキャンプなどの教育プログラム、広報、支援者サポート、販売に関わるスタッフがチームとなり、連携を取りながら目的達成を目指します。

今年度は、寄付・マンスリーサポーター増強キャンペーンを計4回行いました。4月のイースター・渡航費キャンペーン、8-9月の夏の寄付キャンペーン「食べものからの平和」、10月の「収穫感謝の日」におけるマンスリーサポーター募集キャンペーン、そして12-1月のクリスマス・冬の寄付キャンペーンです。キャンペーンを通じて、40名以上の新しいマンスリーサポーターを迎えることができました。

9月には、アジア学院で企業研修を行うことのメリットや可

能性を、実際の体験を通じて探ることを目的にした「企業&アジア学院共通の願いでつなぐモニター合宿」を、経営者・企業人6名、大学教授2名、大学生2名を招待して実施しました。参加者のうち2名が、2月に実施されたアジア学院インドネシアスタディツアーに参加し、卒業生の活動現場を10日間にわたって視察しました。帰国後は、その体験をもとに、企業研修の可能性を職員と共に探りました。

11月には、聖心女子大学グローバルプラザ内のオーガニック・レストランにて初の支援者拡大イベントを開催しました。「Tasting Climate Action ー食卓から気候変動行動へ」と題したディナーイベントに、幅広い分野から約40名以上が参加しました。

2025年度、様々な機会を通してアジア学院と共に歩んでくださったすべての皆様に心より感謝いたします。

アジア学院職員による講演・ワークショップ等

【教会関係】日本メノナイト帯広キリスト教会、日本メノナイトキリスト教会協議会平和宣教センター、(教)小山教会、東京ユニオンチャーチ、学生キリスト教友愛会【学校】矢板中央高校、大田原高校、星の杜中学校、新島学園短期大学、共愛学園前橋国際大学、青山学院大学、国際基督教大学高校、聖心女子大学、明治学院大学、青山学院高等部、国際基督教大学、恵泉女学園中学・高校、清泉大学、金城学院中学校、愛農学園農業高校、同志社国際学院初等部、同志社中学校・高校、同志社国際中学校・高校、同志社香里中学校・高校、同志社女子中学校・高校、同志社女子大学、平安女学院中・高校、関西学院大学【その他】コミュニティ・サミット in KIBOTCHA、栃木県文芸家協会、西那須野ロータリークラブ、那須おはなしかご、栃木県栄養士会、シンポジウム 地域循環に根差した農業の未来～手作り地場産バイオガス液肥を中心に～(NPO ふうど主催)、日立フラットチャンネル、ワールドビジョンジャパン、IBS 社団、多摩友の会、キリスト教学校教育同盟関東地区大学部会、ハイチの会、東南アジアの自然と農業研究会、共働学舎、ウィメンズ・カンファレンス、Multinational Exchange for Sustainable Agriculture (MESA)

カナダ合同教会の多大なる ご支援に感謝

国際関係報告



ジャック・リクテン
国際関係課

カナダ合同教会はこの5年間、アジア学院にとって大きな恵みとなるご支援を続けてくださいました。カナダ合同教会が進めている「脱植民地化」*の取り組みの一環として、同教会が日本国内で所有していたすべての資産を、アジア学院を含む日本のパートナー団体への支援という形で返還してくださったのです。

この5年間でアジア学院がいただいた総額は9,700万円にのぼり、その資金は30名の学生の奨学金、複数の特別プロジェクト、ベクレルセンターの運営、卒業生アウトリーチ課職員の人件費などに活用されました。カナダ合同教会は、アジア学院が持つ人を変容させる力、そして世界各地で卒業生が生み出している確かな働きを高く評価し、無条件のご支援を寄せてくださいました。

この素晴らしい支援が終わりを迎えるにあたり、私たちは今、未来に向けた次なる基盤づくりに注力しています。これほどの規模の資金を補うことは決して容易なことではありません。今後も学生たちの奨学金を確保し、アジア学院を次の50年へと進める新しいプロジェクトの数々を実現するため、皆さまの継続的なご支援を心よりお願い申し上げます。

*カナダ合同教会の脱植民地化：先住民族との関係修復、植民地主義的な教会構造の見直し、そして具体的な償いを進める取り組みを指す。単なる「和解」を超えて、構造改革や権力の共有、実質的な補償へと踏み出す試み。



カナダ合同教会のウォン・ハー氏(右から4番目)と

「食べて」支える 持続可能な学び

販売報告



佐藤 裕美
募金・国内事業課
販売

収入創出を主とした活動に加え、新しい試みを実施いたしました。東京でのディナーイベントがきっかけとなり、都内の三ツ星レストランのオーナーシェフであり環境活動家でもある生江史伸氏から「ルバーブときな粉のケーキ」のレシピを無償提供していただきました。1月のアジア学院フレンズデーでは、そのケーキの製造から袋詰め、そして販売まですべての工程を研究科生が担当し、商品販売を通してアジア学院の活動をアピールしました。

また、2024年度末頃に始めた、アジア学院ショップで販売する卵のプラスチックパックの利用見直しについて、2025年4月からは紙パックの有料化およびお客様にパックをご持参いただくよう促すことに努めました。その結果、年間約4,000パック/40kg分の使い捨てプラスチックパック利用を削減することができました。さらに豚肉処理時の骨抜き技術を習得して学院内で作業を担い、自家消費分と販売分を合わせた作業加工代15万円(50頭×3,000円)の経費削減と、骨抜き委託時に発生してしまう紙廃棄物140kg(50頭×段ボール箱2.8kg)の削減に寄与しました。



研究科生のジェレミヤさん(左)の焼き菓子プロジェクト

卒業生とのつながり

教務課 卒業生アウトリーチ

手を取り合い、励まし合う アジア学院同窓会

卒業生アウトリーチ報告



スティーブン・カッティング
卒業生アウトリーチ



2025年度、3つの地域でアジア学院同窓会（ARIGA）の集会が開かれました。

フィリピン

「みんなジープニーに乗って！」誰かが叫びました。「16、17、18…。よし、全員そろったか？出発だ。」一体どこへ行くのか。全員とは誰のことか。そして、ジープニーとは何なのか。疑問に思うかもしれません。「全員」とはアジア学院の卒業生たちのことであり、彼らは同じく卒業生であるアリエルの農場で開催される同窓会へと向かっています。そしてジープニーについては、写真を見てもらうのが一番早いでしょう。

毎年、フィリピン全土から卒業生が集まり、同窓会の年次総会が開かれます。集まる面々は実に様々です。一人は牧師のジミ。ミンダナオ島で数千人の先住民に有機稲作を教えてきた人物です。彼の冗談と笑い声が絶えることはありません。ルソン島の山奥で暮らす農家のドルフェは物静かな性格で、学院で学んだ有機農業の技術を協同組合の仲間にそっと伝えています。さらに、行き場のない子どもたちのための「家」、大所帯の「ジャイレ・チルドレンホーム」からやってきた二人もいます。ジョエルが30年以上前にここを立ち上げ、サラは7年前から子どもたちの「母親」を務めています。

同窓会は、卒業生たちが互いに励まし合い、経験を共有する場です。例えばアリエルは、椰子の花から砂糖を抽出する方法を披露しました。ジョフェルは、長年の海外就労から帰国したフィリピン人が地元で再定着するための支援について語りました。



語り合い、笑い、議論し、学院での思い出に浸るうちに、ある明白な感覚が膨らんでいきました。それは「アジア学院スピリット」としか言いようのないものです。それが空気を満たし、一人ひとりの心を満たしていきます。そして、人々に奉仕するという困難な活動を続けるための決意を、再び呼び起こしました。これこそが、アジア学院同窓会の醍醐味であると私は信じています。

スリランカ

10月、スリランカでは29名の卒業生が集結しました。荒川朋子常務理事、職員の阿部真希子、そしてKIBOアライアンス（旧アジア学院北米後援会）の理事及び関係者ら計8名も出席しました。荒川は次のような言葉を寄せています。

「スリランカは大きくシンハラ族とタミル族の2つの民族の人々がいます。また仏教徒、キリスト教徒、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒が共存していますが、アジア学院の卒業生の中にはそのすべての民族、宗教の人々がいます。それぞれが互いを尊重し、それぞれの活動を称えました。



スリランカは長年、多数派のシンハラ族と少数派のタミル族コミュニティ間の緊張に悩まされてきました。さらに、2022年の経済・政治危機以降、国は山積する課題に直面しています。しかし、学院の卒業生たちが違いを乗り越えて集まり、信頼と友情を深める姿は、スリランカの理想的な未来を映し出しているように感じられ、深く心を打たれました。」

インド・ナガランド州

インドのナガランド州では、9月にアジア学院の卒業生が集まり、長年の中断を経て初となる「公式の」同窓会が開催されました。卒業生たちは再会を喜び、今後の定期的な集まりを約束しました。

続く4月の集会では、それぞれの経験や課題、そして成果を共有し、次回の集まりからは種子交換会や自分たちの製品の販売を行うことを決定しました。再び手を取り合い活動できることに、誰もが期待を膨らませています。

広がるネットワーク ベトナムの卒業生たち

2025年11月、私はベトナムの卒業生たちを訪ねました。ベトナムに何名の卒業生がいるか、ご存じでしょうか。現在は6名。その歴史は、2015年にアジア学院で「ドゥック」と呼ばれていたフン・ンゴッ・ドゥックから始まりました。彼が最初の一人となり、それ以来、ネットワークはゆっくりと、しかし着実に広がっています。

北部にはヒエンがいます。彼女は土に触れることをこよなく愛する一方で、健康的な食品のマーケティングにも関心を寄せています。彼女は夫と共に、農場から直送された新鮮な食材を提供するレストランを2軒立ち上げました。

中央高地にはラーがいます。山間の故郷に戻った彼女は、木々がすべて消えてしまった光景に衝撃を受けました。そこで彼女は植林を始めました。やがて仲間が集まり、現在は「レイジー・ヴィレッジ（怠け者の村）」と自称する小さなコミュニティで、植林、自然農業、そして質素な生活を実践しています。

そしてもちろん、デルタ地域にはドゥックがいます。彼は卒業後、有機農業のカリキュラムを開発し、大学で教鞭を執っています。同時に有機農場も開設しました。教え子たちが農場を手伝いに来るだけでなく、時折、幼い子どもたちが自然を探索し、遊び、自然を愛する心を再発見するための活動も企画されています。

これらはベトナムから届いた刺激的な報告のほんの一部に過ぎません。卒業生の数がどんどん増える中で、今後どのような展開が待っているのか、楽しみにしています。



ドゥックと彼の有機農場

(写真)

- 1) フィリピン同窓会出席メンバー、(丸枠内) ジープニー（乗合バス）
- 2) スリランカ同窓会出席メンバー
- 3) インド・ナガランド州同窓会出席メンバー

今年度は、緊急性の高い支出が重なったこともあり、借入金（一部）の返済猶予申請をし、退職金積立（1,500 千円）と施設設備維持積立（2,460 千円）の計 3,960 千円についても、一時的に積立を停止する措置を取りました。農村指導者の成長を目の当たりにし喜びを感じる一方で、資金的には厳しい状況が続いています。

貸借対照表

2025 年度末時点での資産は約 663,050 千円で前年度よりも約 43,200 千円（内減価償却費約 45,000 千円）減少しました。一方負債の部は約 156,600 千円で前年度よりも約 9,900 千円減少しています。これは借入金返済（約 5,960 千円）と学校債償還（1,000 千円）の合計約 7,000 千円の返済や、未払金や前受金の減少（約 1,400 千円）によるものです。

資金収支

2025 年度末の翌年度繰越支払資金は 12,178,670 円でした。年度当初よりも約 8,200 千円減となっています。今年度は、田植え前のトラクター故障、コイノニア食堂の熱中症対策としての大型エアコンの導入、Windows11 対応パソコンの購入など、緊急性の高い支出が重なりました。教育研究用機器備品としては、熱中症対策として 4 か所（コイノニア食堂、図書室、チャペル、食品加工棟）にエアコンを設置（約 2,800 千円）、製粉機一式購入（約 1,100 千円）、SVO 発電機（約 800 千円）、パソコン購入及び設定（約 25,300 千円）の支出がありました。管理用機器備品、車両支出としては、古本市会場の給気口設置等（300 千円）、中古トラクター購入（2,750 千円）がありました。

事業活動収支

事業活動収入 約 1 億 50,800 千円（予算達成率 98%、前年比 93%）

今年度の収入については、事業活動収入が予算に対して約 3,290 千円不足し、達成率は 98%となりました。一方で、予算外の指定寄付が約 8,300 千円増加し、全体収入を大きく下支えする結果となりました。付随事業収入は前年とほぼ同水準の 29,560 千円台を維持し、施設設備収入は予算比 127%、前年比 111%と堅調に推移しました。

●学生生徒納付金：約 41,300 千円（予算達成率 100%、前年度比 104%）

日本人学生 2 名及び組織強化研修生 1 名の学費の他、国内 10 団体、海外 4 団体、国内 2 個人からの学費指定納付金がありました。

●寄付金収入：約 69,940 千円（予算比 93%、前年度比 83%）

国内寄付：約 28,870 千円

海外寄付：約 22,100 千円

その他補助金：約 16,460 千円

特別寄付：約 2,510 千円

●付随事業収入：約 29,560 千円（予算比 98%、前年度比 105%）

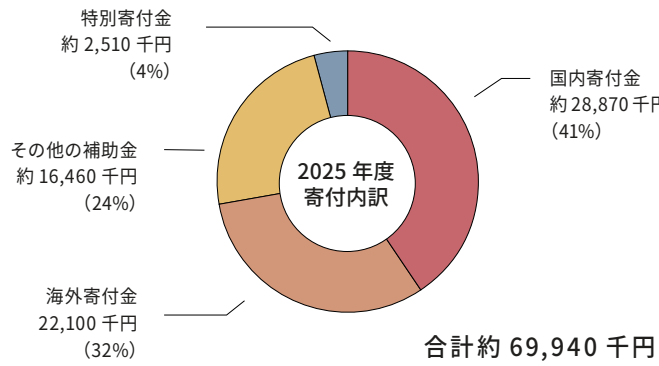
2024 年度に続き、アジア学院企画及びコーディネーション収入は過去 2 番目に高い収入となりました。冬期に開催したインドネシアスタディツアーの参加費（10 人分・1,570 千円）やセントオラフ大学等、国内外の多様なグループの参加があり、オープンラーニングプログラムが充実していることがわかります。販売は前年比では 91%と収入は減少しました。米の学内消費量が想定より多く、販売分を十分に捻出できなかったことや、夏の暑さにより鶏卵の生産不調および大豆の品質劣化等の影響があり収入の伸び悩みがありました。

事業活動支出 約 192,805,276 円（予算達成率 98%、前年比 100%）

支出の部は予算よりも約 4,000 千円抑えて終わることができました。各部門での経費削減の努力の成果でもあります。

御支援頂きました皆さまに心から御礼申し上げますと共に、これからも尚ご指導ご支援を頂きたいお願い申し上げます。

（事務局長 佐久間 郁）



貸借対照表

資産の部	2024 年度末	2025 年度末
流動資産	27,478,448	20,930,192
固定資産	685,323,401	642,115,328
有形固定資産	619,597,472	585,435,807
特定資産	65,330,299	56,283,891
その他の固定資産	395,630	395,630
資産の部合計	712,801,849	663,045,520

負債の部

流動負債	40,756,341	63,365,810
固定負債	125,753,406	93,266,676
負債の部合計	166,509,747	156,632,486

基本金の部

基本金の部合計	1,156,502,190	1,166,463,337
---------	---------------	---------------

純資産の部

翌年度繰越収支差額	-610,210,088	-660,050,303
純資産の部合計	546,292,102	506,413,034

負債及び純資産の部合計	712,801,849	663,045,520
-------------	-------------	-------------

資金収支

前年度繰越支払資金	20,357,033
翌年度繰越支払資金	12,178,670

詳しくはアジア学院ウェブサイトをご覧ください
<https://ari.ac.jp/books/#AR>

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第 7 条の規定に基づき、
2025 年度の事業および会計の状況について監査した結果、
適性に執行されたものと認めます。

2026 年 5 月 7 日

学校法人アジア学院

監事：大久保知宏
監事：村田榮

事業活動収支

事業活動収入の部	2025 年度予算	2025 年度決算
教育活動収入		
学生生徒等納付金	41,480,308	41,273,478
手数料収入	54,000	800
寄付金	74,995,915	69,941,339
経常費等補助金	500,000	443,000
付随事業収入	30,000,000	29,561,340
雑収入	7,034,000	9,558,968
教育活動収入計	154,064,223	150,778,925
教育活動外収入計	30,000	120,553
特別収入計	0	2,026,730
事業活動収入計	154,049,223	152,926,208

事業活動支出の部

教育活動支出		
人件費支出	91,484,260	88,798,911
教育研究費	35,581,285	32,260,548
管理経費	68,954,437	70,960,132
減価償却費	42,690,293	44,992,390
教育活動支出計	196,019,982	192,019,591
教育活動外支出計	764,534	785,678
特別支出計	0	0
事業活動支出計	196,784,516	192,805,276

50 周年記念事業関連収支

前年度繰越金	23,843,366
今年度支出	
運営基盤安定化 奨学金	10,100,000 4,000,000
今年度収支差額	9,743,366

🎓 農村指導者研修プログラム・カリキュラム

講義一覧 （* 特別講師）

指導者論	
アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子、阿部・チャタジー・モノシ
リーダーシップと農業	荒川 治
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型学習行動法	荒川 朋子、阿部・チャタジー・モノシ
自律学習	阿部・チャタジー・モノシ
プレゼンテーション技術	阿部・チャタジー・モノシ
時間管理	ティモティ・B・アバウ
ファシリテーション技術	阿部・チャタジー・モノシ
相互フィードバック技術	阿部・チャタジー・モノシ
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・B・アバウ
報告書作成指導	阿部・チャタジー・モノシ
農村指導者論	スティーブン・カッティング
衛生管理と女性の健康	キャシー・フローディ
平和と和解	恵子 ホームズ*（アガベ・ワールド）
フアンドレイジング	シェリー・デレオン*（KIBOアライアンス(旧アジア学院北米後援会)）
プロジェクト計画ワークショップ	ジャック・リクテン、篠田 快、阿部・チャタジー・モノシ
尊厳ワークショップ	ジェフリー・メンセンディーク*（桜美林大学）、荒川 朋子、阿部・チャタジー・モノシ
	坂原 辰男*（元 NPO 田中正造大学）
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	森川 有理*（グローバルセンセーション代表）
コーチング	

持続可能な農業・技術

有機農業	櫻井 将伸
野菜・作物概論	櫻井 将伸、岡田 英里
畜産概論	ニコラス・タフヤン、ソー・マナー・シェイ、ティモティ・B・アバウ
養鶏技術	ティモティ・B・アバウ
家畜衛生と疾病管理	ティモティ・B・アバウ
ヤギ飼育管理技術	ニコラス・タフヤン
養豚技術	ソー・マナー・シェイ
化学農業の危険性	櫻井 将伸
熱帯における自然農業	村上 真平*（自給自足カレッジ監修）
生産者と消費者の提携	戸松 礼菜*（帰農志塾）
バイオガスワークショップ	桑原 衛*（NPOふうと）
農業技術実習	櫻井 将伸、岡田 英里
畜産技術実習	ティモティ・B・アバウ、ソー・マナー・シェイ、ニコラス・タフヤン
肉加工実習	櫻井 将伸、岡田 英里、ソー・マナー・シェイ、金子 麻里佳、小出 秀夫*（ノイ・フランク那須）
	オルデンドウ・シェカー・チャタジー*（76 年卒・インド）
環境再生型農業の原則と実践	

開発論

栄養概論	金森 郁美
環境と開発	佐藤 真久*（東京都市大学）、大柳 由紀子
ジェンダー論	荒川 朋子
ローカライゼーション	鎌田 陽司*（NPO法人 懐かしい未来）
共助組合論	阿部・チャタジー・モノシ
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
気候変動教育	永田 佳之*（聖心女子大学）
マーケティング	ヴェニータ・カドゥヤ、ティ・ティ・ウィン
日本の有機農業運動	大柳 由紀子
日本の差別問題	阿部・チャタジー・モノシ
エコロジー・天然資源教育	阿部・チャタジー・公子*（開発調査コミュニケーションセンター（DR CSC）、インド）
	丸谷 一耕*（木野環境）

卒業生セミナー

アメリカミズアブ飼育管理技術、組織的持続可能性	シュクル・ムニグワ・セラフィン*、モルデカイ・ミリンディ・ジョナス*（以上 22 年卒・コンゴ民主共和国）、ザチボル・ラコー・ドーゾ*（00 年卒、09 年 TA、元職員・インド）、マンブツ・ケスティン・サマイ*（18 年卒・シエラレオネ）
-------------------------	--

日本語・日本文化

	小倉 恭子*、荒川 千衣子*
--	----------------

有機農業実習

野菜作物：ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、自然農業、粉殻くん炭、自家採種、ヒューゲルカルチャー、練り床を利用した苗作り
畜産：養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎
肉加工：ソーセージ、チャーシュー、ハム、ジャーキー

フードライフ管理活動

グループによる農場管理(野菜作物栽培、および畜産管理)
フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈り、森林管理など）、内的成長を促す活動（朝の集い、コンサルテーション、リフレクションペーパー（月ごとの文章課題）、振り返りの日）、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行など

研修・交流でお世話になった方々

（敬称略、順不同）

農業関連見学・研修先

【 栃木県 】 帰農志塾、まんまる農園、ドンカメ、陽だまり農場、古谷農産、民間稲作研究所
【 埼玉県 】 金子宗部、田下降一、桑原衛、丸木美術館
【 山形県置賜地区 】 渡部務・美佐子、原田俊二、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園高校、JA山形おきたま農業組合、しらたかのらの会、山形県戸沢村国際交流協会
【 山形県庄内地区 】 加藤鉱一、佐藤直樹、小野寺喜作、庄内協同ファーム、JA庄内たがわ営農農政課、荘内教会保育園、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、鶴岡市立農業経営者育成学校 SEADS
【 岩手県 】 自然農園ウレシバモシリ（酒匂徹・合歓）

見学先・交流団体

【 栃木県 】 足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所跡）、渡瀬川遊水池、那須疎水、大田原高校、西那須野幼稚園、なす謡友会、津軽会
【 東京都 】 日本基督教団全国教会婦人会連合世界教会運動委員会、日本バプテスト同盟全国女性会

西日本研修旅行

【 東京都 】 農村伝道神学校
【 静岡県 】 山中忍、聖隷クリストファー中・高等学校、聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園、聖隷歴史資料館
【 三重県 】 愛農学園農業高校
【 大阪府 】 大阪 YMCA、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク、関西沖縄文庫、コリア NGO センター、（教）希望ヶ丘教会、阿部野教会
【 広島県 】 広島平和記念資料館
【 山口県 】 梅光学院大学
【 熊本県 】 大澤菜穂子、からたち、水俣病歴史考証館、坂本しのぶ、松木幸蔵

👥 コミュニティメンバー 一覧

職員

荒川 治	校長
大柳 由紀子	副校長、教務補佐
佐久間 郁・ヴェロ	事務局長（総務課長）
阿部・チャタジー・モノシ	教務主任（教務課長）
篠田 快	教務課（学生募集）
キャシー・フローディ	教務課（学生募集）
スティーブン・カッティング	教務課（卒業生アウトリーチ）
田中 順子	教務課（図書）
ジョエラ・ラナイヴォソン	教務課（共同体生活）
ティモティ・B・アバウ	チャブレン、教務課（共同体生活）、フードライフ課（農場）
ジョナサン・マッカーリー	チャブレン、教務課（共同体生活）
マッカーリー 里美	教務課（共同体生活）
櫻井 将伸	農場長（フードライフ課長）
岡田 英里	フードライフ課（農場）
ソー・マナー・シェイ	フードライフ課（農場）
ニコラス・タフヤン	フードライフ課（農場）
金森 郁美	フードライフ課（FEAST[給食・食育]）
ティ・ティ・ウィン	フードライフ課（FEAST[給食・食育]）
藤吉 求理子	フードライフ課（FEAST[給食・食育]）
江村 悠子	総務課（総務補佐・支援者サポート）
杉崎 由佳	総務課（会計）
安藤 香	総務課（庶務）
荒川 朋子	常務理事、関係構築・アウトリーチ統括
山下 崇	募金・国内事業課長（教育プログラム・那須セミナーハウス主事）
	募金・国内事業課（支援者サポート・広報）
井澤 昶	募金・国内事業課（販売）
佐藤 裕美	募金・国内事業課（教育プログラム補佐・那須セミナーハウス管理人）
ルイバ・ヴェロ	募金・国内事業課（食品加工）
金子 麻里佳	募金・国内事業課（販売・食品加工）
宮谷 結花	募金・国内事業課（販売・食品加工）
ジャック・リクテン	国際関係課
阿部 真希子	コミュニティナース、募金・国内事業課補佐

ボランティア、インターン、その他

通いボランティア

フードライフ課（農場）：黒田雪奈・貴美・楓奈・樹奈、林哲、人見恵子（兼総務）、マッケロップ・ネベア、船渡啓翔
フードライフ課（FEAST）：荒川 千衣子、エファ・シミン・ルーシ、木村 裕子、高村 京子、ラビアル・ラモン・J・エスメリオ
募金・国内事業課（販売）：猪股 美恵、柏谷 重明、熊見 一紀、クリスティ・アバウ、小西 恵祐、小西 小百合、杉田 万由子、並木 レベッカ、東 千尋、堀内 紀江、三宅 隆史
総務課（営繕）：井出 幸男、清水 益夫
総務課（庶務）：渋川 恵美

ベクレルセンター（放射能測定室）

西川 峰城、藤本 渉平（兼販売）

長期滞在ボランティア

リアン・クリーステン、オリヴィア・マイヤーズ、ケネス・チウ、エリス・クレ、スコット・バート、オーロラ・サルシェ（以上農場）、スミラ・グルース、クリス・ミーダー（以上 FEAST、農場）、荒川 萌（共同体生活、農場、国内事業、教務）、増川 真子（FEAST、農場、国内事業）、山中 この葉（FEAST、広報）、デボラ・ブラダ・シナガ（FEAST）、メイ・ワン（FEAST、教務）、リンダ・シュミット（学生募集、販売）、エルサ・カーキガード（農場、国際関係）

インターン（2ヶ月以上）

リッツィー・エストラーダ（農場、教務）、マリエル・ランダール（農場、卒業生アウトリーチ）、イライザ・パットナム（FEAST、農場）、リ・チェル・ムー（FEAST、学生募集）、デイジャ・デヴィース（農場）、エミ・ハーナー（共同体生活、国際関係）

その他

伊藤 幸史（組織強化研修生（OCBT））、門田鶴介（愛農学園農業高校専攻科）、コフィ・ロマリック・アフアッチャオ（合同メソジスト教会グローバル・ミッション・フェロー）

役員 （肩書きは2026 年 6 月 30 日現在）

理事長	
山本 俊正	元関西学院大学教授
副理事長	
山根 正彦	（学）香川栄養学園 元常務理事
理事	
荒川 治	アジア農村指導者養成専門学校校長
荒川 朋子	（学）アジア学院常務理事
粟谷 しのぶ	成城大学法学部専任講師、弁護士
後宮 敬爾	日本基督教団豊南坂教会牧師
小海 光	公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
佐藤 範明	元ホテルサンバレー那須顧問
永田 佳之	聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
矢萩 栄司	日本聖公会下館聖公会牧師
監事	
大久保 知宏	藤井産業（株）執行役員 総務部長
村田 榮	那須ワイズメンズクラブ

評議員 （肩書きは2026 年 6 月 30 日現在）

荒川 治	アジア農村指導者養成専門学校校長
荒川 朋子	（学）アジア学院常務理事
粟谷 しのぶ	成城大学法学部専任講師、弁護士
飯塚 拓也	日本基督教団関東教区宣教部委員長、竜ヶ崎教会牧師
伊藤 幸史	カトリック新潟教区司祭
岩谷 幸子	全国友の会副代表、横浜友の会
宇野 三恵子	聖心会日本管区元管区長
海老根 智仁	（株）レジェンド・パートナーズ取締役会長
大柳 由紀子	アジア農村指導者養成専門学校副校長
菊地 功	カトリック東京大司教兼枢機卿
佐久間 郁・ヴェロ	（学）アジア学院事務局長
菅谷 実	慶応義塾大学名誉教授
セラジーン・ロシート	NGO/NPO コンサルタント
千 相鉉	在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
田口 努	（公財）日本 YMCA 同盟代表理事・総主事
永田 佳之	聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
潘 炯旭	日本基督教団西那須野教会牧師
丸谷 一耕	特定非営利活動法人木野環境代表理事
山下 崇	（学）アジア学院職員
山根 正彦	（学）香川栄養学園 元常務理事
横手 仁美	森六株式会社社外取締役

特別顧問

遠藤 抱一	元アジア学院職員
門脇 英晴	（株）日本総合研究所特別顧問



2025 年度 卒業生 () 内は送り出し団体名

農村開発科

インド

1 アンソニー・カルヴェロ (ゴア・ダマン大司教区)

2 ケンワン・ディウェン (トゥツァ・バプテスト教会協議会)

インドネシア

3 マレムコンピ・チャヌ・モイランテム (総合農村開発サービス機構)

4 アンディ・ウィスノ (バタック・プロテスタント・キリスト教会)

5 サルモ・ベルトウ (バクバク・ダイリ・キリスト・プロテスタント教会)

6 ベリヤンティ・オクタヴィア・ダマニク (スマルングン・プロテスタント・キリスト教会)

ウガンダ

7 ジダ・ナクワンガ (アフリカ教会機構)

エスワティニ

8 サンプロ・シゾ・ンカベラ (アフリカ教会機構)

ガーナ

9 フランシス・クワミ・アヒアゾ (持続可能な地域開発センター)

カメルーン

10 ヨン・プロスパー・ンゴ (ビジョン・イン・アクション・カメルーン)

カンボジア

11 サヴン・サヴ (プレス・カンボジア・ネットワーク)

ケニア

12 ディケンズ・ワソング・オグット (ノミヤ・フウェヌ・マレール教会)

コンゴ民主共和国

13 ルコゴ・カヒュンバ・ファラジャ・ジョザファト (中央アフリカペンテコステ教会コミュニティ フヌ・ヌル)

ザンビア

14 ジュディス・ナカニカ (ミンドロ・エキュメニカル財団)

15 ニュートン・ムワンサ・チサンガ (ミンドロ・エキュメニカル財団)

16 リリー・シンゲレンゲレ (緑の農業 青年の会)

スリランカ

17 アルンブシュパラジ・ラジャクマラン (スリランカ・メソジスト教会)

フィリピン

18 サラ・ミシェル・アゾレス・ヴィオレン (ジャイレ・チルドレンホーム)

19 マデリン・ブランコ・ヒネロソ (アディカ海外労働者・コミュニティ・イニシアティブ)

ベトナム

20 ター・トゥイ・トラン (メコン・オーガニック)

ミャンマー

21 エリザベス・ンゲン・チン・パー (農村開発のための地域連合)

22 カウ・タン・ウィン (リス・バプテスト連盟)

リベリア

23 A・ヴァーマー・サインディー (経済的エンパワメントと開発のための国民行動)

24 レベッカ・M・J・トンプソン (ペンテコスタル・ミッション・アンリミテッド)

25 ロバート・S・デリック (合同メソジスト農村・農業開発プログラム)

日本

26 大木 瑞紀

27 川月 直志

研究科

インド

28 ジェレミヤ・ナルザリー (プリシラセンター)

マラウイ

29 ヴェニータ・カドゥヤ (ゾディアック放送局)

「一人のリーダーが変われば、
コミュニティがまるごと変わる。」
みなさまの想いをアジア学院に
託してください。

郵便振替

振込口座：郵便振替 00340-8-8758

口座名義：学校法人アジア学院

銀行振込

足利銀行 西那須野支店

口座番号：112403 (普通預金)

口座名義：学校法人 アジア学院

クレジットカード (オンライン決済)

クレジットカードなら
オンラインで簡単に
ご寄付いただけます。
右のQRコード、または
<https://ari.ac.jp/donate>
へアクセスしてください。

